

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail : nishikouarigatou@gmail.com

Instagram : nishikouarigatou
twitter : @nishiko_arigato
Hashtag : #ありがとう西高

西高の歴史を振り返る

どのようにして西高の基盤が出来上がっていったのか。第2回の今回は、創立3年から10年までの歴史を振り返る。現在の三橋4丁目校舎に至るまでの西高の歴史、新校舎の完成、また校歌や校訓の制定など、西高の基礎が出来た時代を取りあげていきたい。

第2回 最後の移転、校歌校訓の制定

1963(昭和38)年、創立から1年後、現三橋中学校の鉄筋校舎に移転した。当時西高の社会科の教員であった黒澤武光さんは、創立25周年記念誌において「私たちは、当初そこが西高の最終の地になるものと喜んでいました。やがて、中学校が使用するというので、立ち退くことになり、みんながっかりしたと思います」と述べている。三橋中学校と校舎を交換する形で、翌年1966(昭和41)年3月25日、旧三橋中学校の古い木造校舎に移った。その地こそが、現在の大宮西高校の敷地であった。木造校舎の横にはヒマラヤスギの木がそびえたち、平屋建ての管理棟、左側には二階建ての木造校舎が二棟、傍らには現在も残る稲荷塚古墳、教室の仕切りは木の扉、穴からはネズミが顔をのぞかせていたという。当初は図書館や教科の研究室もなく、ホームルームと職員室だけの校舎でだいぶ不便をしたようだ。1967(昭和42)年8月15日、旧体育館兼講堂が完成。創立から9年後の1971(昭和46)年、現在図書館や理科教室等がある北校舎の一部が完成した。さらに翌年、現在のホームルーム教室が並ぶ北校舎が完成。木造校舎は、現在職員室などがある南校舎が作られることになったことでその役目を終え、1975(昭和50)年に解体された。

このさなか、創立3年後の1965年には西高の校歌が作られた。作詞は宮澤章二氏、作曲は大中恩氏だ。「若き憂いも喜びも」で始まるこの校歌、懐かしさにかられる卒業生も多いことだろう。創立25周年記念誌には作詞の宮澤氏の言葉が掲載されている。「校歌作詞



役目を終えて解体される木造校舎(昭和50年)

のため、生徒会役員諸君数名と話し合いをする」。同年9月4日、旧大宮商工会館(現在のソニックシティ辺り)において校歌の完成発表会が行われた。余談ではあるが、後に宮澤氏は大宮光陵高校の校歌も作詞している。

1966年には現在も受け継がれている「和敬信愛」の校訓が制定された。当時の矢部金蔵校長は「良心が枯渇、無感傷、無頓着な、まことに心細い世の中であるが、私達は本当に愛せる人間、愛し合える人間になりたいものである。(中略)生徒諸君も是非こうした精神で明るい世の中を作っていくほしい。心豊かな品位ある高校生に、そして、意欲旺盛な高校生に飛躍していただきたい」と述べたと、大宮西高新聞12号に掲載されている。

当時の矢部校長の想いは、50年以上経った今でも、西高を巣立った幾千もの卒業生、現在の西高生に受け継がれているのだろうか。

この後の西高は、部活動の活躍、国際交流の発展など進化を遂げていく。今回取り上げた時代はまさに、西高の学校としての地盤作りが、生徒・教員一体となって行われた時代であった。



左下が「重層」右上が「旧体」(2005年撮影)

あの場所は、今 -重層体育館篇-

重層体育館は1986年の落成以来20年あまりの間、前回書いた旧体育館と共存していたが、記者が在学していた2002年から2005年もその期間に入る。既に入學式や卒業式は重層体育館で行われていて、ここが高校生活の始まりと終わりの場所だった。紙吹雪と歓喜の音が響く卒業式も思い出深い、武道場で行った体育の授業で何度も投げ飛ばされた記憶や、煌びやかな文化祭のステージの印象も強い。個人的には文化祭や新入生歓迎会などで携わった進行管理や音響効果といった裏方作業の経験が現在の仕事にも活かしている。この頃から、屋内球技に加えてバトン部やダンス部など屋内で練習を行う部活が多くなると、新旧どちらの体育館でも時間や場所を細かく区切り、譲り合って使う様子が見られるようになった。

現在ではトレーニングルームも整備され、かつてよりさらに設備が充実している。旧体育館で行われていた部活も加わり、雨の日などは屋外の部活も含めて多くの生徒で混み合うというが、譲り合いの精神も受け継がれているに違いない。また2018年9月に、ありがとう西高実行委員会が参加した文化祭でも司会の巧みなマイクパフォーマンスは健在で、ステージのレベルは年々上がっているらしい。比較的新しいこの伝統は、開会式に代表として立ち会った40代の卒業生には新鮮だったようだが、新校移行後も残る重層体育館で、こちらも長く続いてほしいものだ。(石川)

大宮西高伝

世代を超え、現役へ注ぐ熱い思い

山田 守男さん

取材時は2018年8月。まだ暑い日差しが照り付ける夏休み中、グラウンドで野球部の練習に視線を注ぐ1人の男性がいた。男性は山田守男さん。大宮西高校第1期生の一人。そして、大宮西高創立当初から立ち上がった部活動の一つ、野球部の伝統も培った一人でもある。

今回の大宮西高伝では、在校当時は野球部のキャプテンを務め、現在は、野球部OB会会長の山田守男さんに話をうかがった。

入学後、西高とともに転々と

山田さんは大宮西高（当時は埼玉県大宮市立高等学校）が創立した1962年に入学している。あえて当時の新設校を選んだきっかけは何だったのだろうか。山田さんによれば、当時、偏差値という指標はなく、中学生の頃にアチーブメントテストと呼ばれる学力テストを受験。この結果で受験する高校が選別された。志望校の選択も時代を映す。

山田さんが入学した頃の大宮西高は「最初は日進の自衛隊（の場所）だったんですよ」。遠くを見つめるように、山田さんは歴史の一端を語り始める。

山田さんの記憶によれば、当時の校舎は4つの教室と職員室があるくらいで、「もともと化学学校だったところを西高の校舎として



猛暑の中、取材に応じてくれた山田守男さん。視線の先には現役野球部の姿があった。

使ったんです」。そのため、自衛隊員と同様に、自衛隊の門をくぐって登下校していた。

その後、山田さんが高校2年生のときには、現在の桜木小学校の場所へ。3年生のときには、現在の三橋中学校の場所へと、大宮西高は毎年のように移転を繰り返した。

野球部の始まりに懸けた思い

ところで、山田さんが所属した野球部はいつ頃から活動していたのだろうか。答えは、創立当初からだという。「グラウンドはないけれど（野球部を）作ったんです」。山田さんたち当時の野球部は、学校が移転を繰り返しながらも、近隣のグラウンドを借りるなどして練習に励んだ。

「下手だったけど」と山田さんは前置きしつつ、野球好きな者同士が集まっていたという当時の野球部。キャプテンを務めた山田さんは、時に仲間と厳しく接することもあったと語る。努力は実り、2年目の春には見事、県大会ベスト8の成績をおさめた。山田さん

は「仲間がついてきてくれました」とチームメイトへ思いを馳せた。

山田さんは卒業後、仕事のため、長らく西高からも、野球からも離れていた。だが、自身が50代に入り、西高野球部の活躍を聞くにつれ、再びグラウンドに足を運ぶようになる。野球部OBによる、マスターズ甲子園出場にも貢献した。

部員がいる限り、続く野球部

以来、現役野球部が公式戦出場たび、欠かさず新聞紙面をチェックしていた山田さん。トーナメント表を見れば、勝敗を鉛筆でなぞりながら応援するのが、習慣となっていた。ところが、昨夏に発表された新人戦のトーナメント表に肩を落としたという。見返しても、大宮西の名前がない。3年生の引退に伴い、出場選手がそろわないためだった。

それでも山田さんはグラウンドに足を運ぶ。1人残った現役生が白球を追う姿に、熱い視線が注がれていた。